

重慶から箱根へ

冰 心

(訳 富永涓子)

羽田空港から東京へ入るともう夜だった。街灯にともされた道は、人々の喧噪や車の混み合っている上海とはまるで異なっていてひっそりとさびしく、人影は見当たらない。私はこれこそが正に夜だと思う。昼間は決してこのようにひっそりと静まり返ってはいない。

私が東京へ来て三日目、友人に伴われて箱根へ行った。東京から横浜への途中、最も印象が深かったのはボロボロの服を着た女性や、やつれ痩せ衰えた人の群れであった。しかし、道路はとてもなめらかできれいだ。

もうすぐ箱根に着く頃、森林はだんだんと深くなり、紅葉が夕陽に映え、曲がりくねった道にいつそうの美しさを添えていた。

山道が大きく曲がるところで、富士山が頭に雪の冠を頂き、紫雲に包まれ、それはまことに形容し難い美しさだ。

欧米の一流ホテルに比べても、箱根の旅館は劣らない。窓辺から望むと、至る所、東洋の趣に満ち溢れている。連峰、軒先、石塔、小橋などなど、奥ゆかしさと心地よさを感じさせる。

その夜、自分でもどうしてこのような感情になったのかよくわからないが、いろいろな想いが入り乱れてなぜか眠れなかった。

次の日、まだ明るくならないうちに起き、カーテンを巻くと、すっかり濃霧につつまれた山並みの中から幽かに松の緑が現れている。

「あ！私の歌楽山！」急に多くの想いが起こりこのように一声上げたくなった——重慶の珍しい山、歌楽山は私の山だ。

私はここであの恋々と離れがたい思いにさせられる歌楽山を紹介しなければならぬ。歌楽山は箱根に比べるとずっと小さく、紅葉も又このよ

うに多くは無い。歌楽山はこんもりと密生した松林に包まれていて、春になると真っ赤なつつじの花が山一杯満開になる。

春の夜、物悲しくさせられるほととぎすの鳴き声を聞くことができるが、山のつつじの紅い色はほととぎすの吐いた血で染められたのだと言われている。

爆撃の日は、いつも見渡す限り晴れた空だった。

驚き慌てる鋭い警報の中、食料、飲み水、ろうそく、毛布を持ち、子供を抱いて薄暗く冷たい防空壕へ飛び込んだ。

その中には、驚きに震えている婦人と子供たちが、顔色を蒼く変えていた。

私たちは声もなく、頭上を飛び交う隊をなす爆撃機の轟々たる爆音、そのうえ猛烈に揺れ動く狂風に長いため息をつき、その後やっと山頂まで登り、もうもうと渦を巻く白煙に覆われた重慶を望み見て、親しい人々の安否を気遣った。

夜間の爆撃は必ず美しい月の夜だった。夜、私たちは壕には入らなかった。

子供たちを寝かせてから、膝に抱いて狭い壕の入り口で待機していた。下を見ると蛍火のような光がだんだんと消えて、たちまち街は全くの暗闇に覆われて、深と静まり返り、ただ遠くからかぼそい犬の鳴き声が聞こえてきた。

嘉陵江はまるで銀白色の絹帯のようだった。

淡い月の光の中で機影は見られない、ただ爆撃音がだんだんと伝わってきて、突然幾筋かのサーチライトが空にさっと渡りすぎる。

「命中！」「命中！」九機、六機、三機と白い蛾のような機体がゆらゆらと揺れて重慶に向かって突っ込んで行き、続けざまに大地を震わす爆裂音とともに、火花が空で炸裂した。

このようにして流れ去った五年の日夜。歌楽山の五年は、“素晴らしい

よい日夜”の中で過ごしたのだった。

恐るべし、呪うべきかな戦争。戦争の終末で私たちは怨みを知った。そして又、私たちは激烈な戦争の体験をしたことによって同情と愛も知った。なぜならば、私が歌楽山にいた最後の二年間、東京では爆撃を受けていた時期と聞き、ある種の言うに言われぬ苦しみの気持ちを感じたのだ。私は無数の東京の若い女性達が夫や肉親を案じながら背中にか弱い子供を背負って警報の鳴る中、防空壕に押し入っていたその悲惨な様子を想像した。

東京を見て私は重慶を思い出し、箱根に来て歌楽山に想いを馳せた。

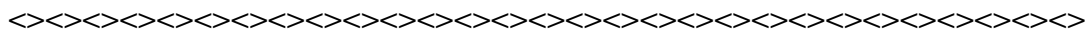
ひどい苦痛は私たちに貴重な経験を与える。大いなる繁栄と安定は侵略の中で得ることはできない。ただ同情とお互いの愛情でこそ共存共栄を成し得る。侵略の中で得ることはできない。

今後永遠に、再び歌楽山と箱根を疎開地にさせてはならない、自然を愛する人々が常に山の頂に登って美しい風景を楽しむようにならなくてはいけない。再び自然の美しさに暗い防空壕を割り込ませてはいけない。

(民国三十五年十月二十二日東京にて)

.....
謝冰心(1900-99):福建省出身。中国近代文学における代表的な作家。

本訳に使用したテキスト:『冰心散文』,北京,人民文学出版社,2005, pp.60-62.



(中国語原文) **重庆到箱根** 冰心

从羽田机场进入东京已经是夜里。呈现在街灯下的街道一片冷落,看不见人影,比起人声嘈杂,车辆拥挤的上海完全成了两样。我想这才是真正的夜。白天决不是这样寂静。

我到东京的第三天,友人带着去了箱根。从东京到横滨的途中,印象最深的是无边的瓦砾,衣衫褴褛的妇女,形容枯槁的人群。但是道路很平坦光洁。

快到箱根，森林渐渐深起来，红叶映着夕阳，弯曲的道路，更增添了一层秀媚。

在山路大转弯的地方，富士山头顶雪冠，裹着紫云，真有一种难以形容的美。

比起欧美的一流旅馆，箱根的旅馆也不算差。从窗口望去，到处溢满东样风味。山岭，房檐，石塔，小桥等等，使人感到幽雅，舒适。

那一夜我怎么也不能入睡，各种各样的想法千头万绪，自己也说不清楚为什么有这样的感情。

第二天，天还没亮就起来，卷起窗帘，完全裹住了山峦的浓雾中隐约地露出青松的绿色。“啊！我的歌乐山！”突然间多么想这样叫一声——重庆的奇峰歌乐山是我的。

我必须在这里介绍那令人留恋的歌乐山。歌乐山比起箱根来要小得多，红叶也没有这样多。歌乐山被茂密的松林包裹着，一到春天，鲜红的杜鹃漫山盛开。

春夜里可以听到杜鹃那令人伤感的鸣叫，山上杜鹃花的红色据说就是杜鹃吐的血染的。

轰炸的日子，常常是晴空万里。

惊慌的尖叫的警报声中，带着食粮，饮水，蜡烛，毛毯，抱着孩子跑进阴冷的防空洞。

这里面，吓得发抖的妇人和孩子们，脸色变得发青。

我们没有声音，对着头上飞过的成群的飞机和轰轰的爆炸声，还有那猛烈摇动的狂风长长地叹息，然后好不容易爬上山顶，望着被滚滚白烟笼罩着的重庆，惦念着自己的亲人是否安全。

夜间轰炸一定是美丽的星月夜。在夜里我们不进入洞中。

让孩子们睡下之后，抱在膝上，等待在狭窄的洞口。往下看萤火虫一样的光亮渐渐消失，很快街道被黑色完全包围，万籁俱静，只有远处传来的微弱的犬吠声。

嘉陵江犹如银白色的绢带。

淡淡的月光中看不见机影，只有爆炸声渐渐地传来，突然有几条探照灯光在天空中一扫而过。

打中了！”“打中了！”九架，六架，三架，白蛾一样的飞机摇晃着冲向重庆，紧接着是震撼大地的爆炸声，火光冲上了天空。

就这样流走了五年的日日夜夜。歌乐山的五年，是在“好天良夜”中度过的。

可怕的、令人诅咒的战争。战争结束我们懂得了怨。而且我们虽然体验了激烈的战争，也懂得了同情和爱。因此，我在歌乐山最后两年中，听到东京遭受轰炸的时候，感到有种说不出的痛苦之情。我想象得出无数东京的年轻女性担心着丈夫和亲人，背着软弱的孩子在警报声中挤进防空壕那悲惨的样子。

看见了东京我想起了重庆，走在箱根感到是走在歌乐山。痛苦给了我们贵重的教训。最大的繁荣的安乐不能在侵略中得到，只有同情和互助的爱情才能有共存共荣。

今后永远再也不要使歌乐山和箱根成为疏散地，要让热爱山水的人们常常登上山顶享受美丽的风光，不能再从自然的美中挤进黑暗的防空壕。